

Title	川端康成「生命の樹」と『婦人文庫』という場：かつての『少女の友』読者の戦後
Sub Title	Kawabata Yasunari's "Inochi no ki" and the space of Fujin bunko : the postwar readers of former Shōjo no tomo
Author	三浦, 卓(Miura, Taku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.109, No.1 (2015. 12) ,p.235- 252
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	藤原茂樹教授 松村友視教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090001-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

川端康成「生命の樹」と『婦人文庫』という場

— かつての『少女の友』読者の戦後 —

三浦 卓

一

戦後における文学の「再出発」を雑誌ジャーナリズムの「再出発」と捉え、それを「四六年の一月号」とする本多秋五は、「戦後第一年目の文学は、まず「大家の復活」からはじまった」と述べる中で、宮本百合子・志賀直哉・永井荷風らとともに川端康成にも触れている。ここで本多に取り上げられている小説は「女の手」（『人間』一九四六・一）、「挿話」（『新潮』一九四六・二、のち「五拾銭銀貨」と改題）、「さざん花」（『新潮』一九四六・一二）で、これらを「ほそぼそとした線の作品」であり、「キメこまかな彼の資質に、当時のあらあらしい空気が適さなかった」としている¹。本多による評価に関してはひとまず置いておくが、本稿で検討する「生命の樹」（『婦人文庫』一九四六・七）²もまた、戦後文学の「再出発」期のテクストの一角をなすものとして位置づけることができる。それは、資質云々の問題とは別に、否応なく戦争の文脈とあわせて読まれていくことになるであろう。とくに「生命の樹」は敗戦間際から戦後にかけての特攻隊に関わる題材が選ばれているため、そして川端テクスト中唯一といってよい銃後ではない「戦争そのもの」を描いたとも言えなくもないために、

なおさらである。

事実、長濱拓磨は、紅野謙介・川崎賢子・寺田博編『戦後占領期短編小説コレクション① 1945-1946』（藤原書店、二〇〇七・九）や『コレクション戦争と文学第八巻 アジア太平洋戦争』（集英社、二〇一一・六）などに「生命の樹」が収録されていることを根拠として戦争文学として「評価されつつある」としている。また李聖傑は、川端の戦争体験に関して概観する中で、一九五五年八月号『新潮』に発表されたエッセイ「敗戦のころ」を手掛かりとして、一九四五年四月から約一か月ほど海軍報道班員として鹿児島鹿屋の海軍基地を訪れた経験を確認しながら、「生命の樹」を「川端の特攻隊の体験を背景とした唯一の作品」と位置付けている⁴。

但し、戦争との関係をどう意味づけるかということとは別の問題である。李は「生命の樹」に関して、「作品は直接特攻隊の死を描くのではなく、特攻に出る前夜に植木と啓子が身体を結ばずに、星を見続ける場面を描くことで、主人公の内面において戦争からかなしみを受けていることをうかがわせる。」などと、どちらかといえば戦争の否定的な側面を描いたものとして読み取って評価しているが、一九四六年に書かれたテクストへの評価としてそれほど意味があるとも思えない。一方で、李も引用している川島至の「川端氏の特攻基地での体験が、『生命の樹』という短編しか生まなかったこと、それも『私』の眼に映ずる自然の美しさが語られる作品しか生まなかったことに、私たちは愕然とし、あの大きな戦争すらも人間的関心を示さずに素通りできた作家に、恐怖に近い尊敬の念を捧げないわけにはいかない。」のような語られるべき戦争が語られていないテクストといくぶんの皮肉を交えて位置付けることも、この時期のテクストのあるべき姿を一元化するような前提を形作ってしまう恐れがあり、「私の眼に映ずる自然の美しさが語られる作品」という把握も含めて、問い直す必要があるのではないか。

様々な問題を考えるためにも、まず「生命の樹」の概要を確認しておく。語り手も担う「私」（啓子）は、近江に育ち京都の女学校に通ったという履歴があるが、敗戦間際の五月を中心としたひと月余りの間、徴用女工逃れの意味もあって、親戚に声をかけられて「九州の南端」にある「特攻隊基地の水交社」へ手伝いに出ている。物語内現在は、特攻隊として命を

落した植木への思慕を抱いたまま、両親にだけは啓子との結婚の意志を示している特攻隊員の生き残りの寺村に東京に住む植木の親のもとへ連れられていく道中であり、その道中において植木との思い出が頻繁に回想されていくという構造を持っている。

このような構造を前提としても、「生命の樹」の次のような記述を確認したとき、たしかにこのテキストに川端の鹿屋体験が反映されていることを否定することは不可能であろう。

沖繩戦が絶望と知つては、もうゐたたまれなかつたと、私は両親に言つた。私は泣いて眠つた。起きるとまた戦況の不利を話して泣いた。／——日本に連合艦隊といふものは最早ないこと、九州の陸上基地に集まつた、特攻隊の「航空艦隊」が海軍であること、あの基地の航空艦隊は菊水部隊と名乗り、特攻隊の攻撃を、第五次菊水作戦、第六次菊水作戦といふ風に呼んでゐること、特攻隊がいくら出ても、沖繩周辺の艦船はさらに減らないこと、出るにも飛行機が少くて、特攻隊員が手を空しくしてゐる時も多いこと、特攻機に護衛の戦闘機をつけられなくなつて、目的地へ行き着く前に敵機に食はれること、特攻機も搭乗員も不足で、練習生が練習機に乗つてまで出ること、この練習生と練習機とを使ふ、特攻隊は秘密であること、(以下略)

近江に帰つた「私」が戦時下において両親に語るこの沖繩戦の絶望的で不条理な状況は、確かに「敗戦のころ」に「特攻隊について一行も報道は書かなかつた」とあるように、決して戦時下では書きえなかつたことであるし、それを隠蔽・脚色して報道しなかつたことにある種の良心を認めることが出来るかもしれない。また、戦後であっても当時の状況を描き出すことに、現場に赴いた人にしか出来ないものとして価値を見出すことも可能であろう。しかし、例えば長谷川泉がこの場面を受けて「この問題をおしつめて行くと、戦争そのもの、そして太平洋戦争そのものの思想的背景まで究極にはたちいたることになる。しかし「生命の樹」では、そのような問題の掘り下げへの示唆はない。」⁷⁾としているように、終始「私」によつて語られるこのテキストは、「戦争そのもの」を主題化しているようには思えないのである。

ここでは、「私」と道中を伴にする寺村の「去年の今ごろは、自分の命が自分のものぢやなかつたんだ。」と言う発言を

ぐる場面について確認したい。この命の所有者をめぐる問題は、当然元特攻隊員にとって自身の経験と敗戦後の身の処し方に関する本質的な問題のほずである。寺村はつづいて、「僕はそのことは忘れないよ。それを思ふと、僕はどんなことだつて出来るし、するつもりだ。」と自身の当時のあり方を今後来るかもしれない苦難を乗り越える際の動力源のようなものとしたうえで、「僕がふやけさうになつたら、お前の命は自分のものぢやなかつたんだと、啓子さん、ちよつと叱つてくれよ。自分の命が自分のものでなかつた時の、僕を見てたのは啓子さんだらう。厳肅なる証人さ。」と啓子（「私」）をその時期の自身のあり方を担保する不可欠な存在として規定している。このような自らの特攻隊員としての体験を戦後を生きる際の肯定的な要素に変換しようとする寺村の論理が「私」に十分に届いていないことは、つづく次のやりとりを見れば確認できるであらう。

私は寺村さんの目が眩しくて、／「そんな——だつて、寺村さんのお命を、寺村さんに帰して下さいた人の方が……。」とまごまご言つた。／「誰だい、そりやあ。僕の命を返してくれたのは、いつたいなものだらうね。教へてもらひたいね。」／「わかりませんわ、私なんぞに……。自分の命さへ自分のものかどうか、わからないんですもの。」／「それはさうさ。人間、誰だつてさうさ。自分の命が自分のものだと証拠立てるには、自殺してみるほかはないだらうさ。」

ここでの「自分の命さへ自分のものかどうか、わからないんですもの」という「私」の発言の背景には、テキストの序盤に頻出する「自分が死ぬつもりである」という思いがあり、それは寺村が自分と結婚する意志を示していると母から聞いたときに生じた思いとして「私が死なうと思つたのは、この時だつた。植木さんのために死んであげよう。」と記述されているように、植木という具体的な対象があつての発言であつた。それに対して寺村は「人間誰だつてさうさ。」と一般論として答えている。この先、議論を広げた上で「僕の命が自分のものでなかつた時の、僕を知つてゐる人を、僕は神としておいてもいいやうな気がする。」と「私」に同様の視線を向ける寺村に対し、「私」は「寺村さんは、私が死ぬつもりであることを御存じない。／また、私と結婚なさりたいといふ、寺村さんの御意向を、私が知つてゐることも、御存じないらしい。」

としている。「私」は寺村と共有されていない情報を前面に出すことによって、寺村の議論を空振りさせている。このような寺村と「私」の関係性の描写に「生命の樹」が「戦争そのもの」を主題化していないテキストであることを象徴的に見ることが出来るのではないか。一人称の語り手である「私」は恐らく「戦争そのもの」とは別のものを見ている。

そもそも冒頭で取り上げた「再出発」という語は戦前／戦後の切断を想起させるものであるし、川端の敗戦直後のテキストもまたそのような文脈で読まれてきた感がある。しかし、この時期の川端からは戦前から戦後にかけての自テキストの一部の要素を反復するようなテキストを紡いでおり、それまでの痕跡をひとたび脱文脈化して戦後の文脈に再編するようなあり方が見て取れる。このことを考慮に入れた時、昭和一〇年代に少女小説家として女学生に人気を博していた川端が、かつて女学生であった「私」の一人称で語る小説を書いていることは、戦前からの反復と戦後における再編の一例として注目できるのではないだろうか。

二

そのような視点で「生命の樹」を捉えかえすとき、従来は書誌以上の意味を認められてこなかった『婦人文庫』という場においてこの小説が発表されたということに、もう少し意味を持たせてもよいのではないか。

『婦人文庫』は、本多のいう雑誌ジャーナリズムの「再出発」の有力雑誌としてこの時期の文学史の一つのトピックでもある『人間』（一九四六・一創刊）と同じ鎌倉文庫が、「本当の女性雑誌を作る」という「モットー」（創刊号「編集後記」）のもとで一九四六年五月に創刊した雑誌である。鎌倉文庫と川端のつながりは既によく知られているが、この『婦人文庫』にも川端は深くかかわっており、鎌倉文庫の解散にともない一九四九年一二月号で休刊したのち約一年を経てひまわり社から出された復刊一号（一九五〇・一二）の「婦人文庫を育くんだ人々」というグラビアでは、一番はじめに川端の写真が掲載されているほどである。誌面にも、創刊号では田中耕太郎・加藤静枝・中野好夫と「新しき女性の再建によせて」という座談会に出席、一巻二号（一九四六・六）でも河盛好蔵・今日出海・芹澤光治良と「結婚と道徳について」という座談会に

出席、そして一卷三号（一九四六・七）に「生命の樹」を発表といったように積極的にかわつてきている様子が見てとれる。

しかし、『婦人文庫』に注目すべきなのは川端のかわりが深いということだけではない。まず注目すべきは、一卷二号から「花鳥」を連載する吉屋信子であろう。先に触れた復刊一号の「後記」には、「当初は吉屋氏が自ら編集する予定になつて」おり、「鎌倉、東京間の国鉄定期券をわざわざ購入した」というエピソードが紹介されている。結局は「直接編集の實際面に当るよりも執筆関係で後援することになつたということではあるが、例えば『少女の友』一九三九年二月号の『新年号の予告』で川端と吉屋が「少女小説の玉座を占める」と位置付けられていたことを鑑みれば、川端と吉屋が並ぶ誌面からは昭和一〇年代の『少女の友』の面影が否応なく浮かび上がってくるであろう。さらに注目すべきなのは、中原淳一が大きくかわつていることである。一九三二年六月号から一九四〇年六月号まで表紙を担当した中原が『少女の友』のある一時代を築いたことはよく知られているし、「乙女の港」（一九三七・六―一九三八・三）、「花日記」（一九三八・四―一九三九・三）、「美しい旅」（正編・一九三九・七―一九四一・四、続編・一九四一・九―一九四二・一〇、中絶）などにおいて川端と中原が『少女の友』における人気コンビであったこともまた然りであろう。その中原が、例えば創刊号では「明るい春のスタイル」、一卷二号では「モンペやゆかたで出来たドレス」という、数枚の挿絵とともに戦後の女性の服装を提言していくような文章を執筆している。これを『少女の友』に一九三七年五月号から三年ほど連載され人気を博した「女学生服装帖」のリバイバルのようなものとして捉えることも可能であろう。その後、「生命の樹」が掲載された第三号からは表紙も担当したこと、自ら立ち上げたひまわり社から復刊号が出版されていくことなども含め、『婦人文庫』にとつて欠かせない存在であったことは間違いない。

川端康成、吉屋信子、中原淳一と並んだ雑誌（ここに「乙女の港」「花日記」の実質的な作者である中里恒子の小説が掲載されていることを含めてもよいかもしれない）は、昭和一〇年代前半のきらびやかだったころの『少女の友』を想起させるのに十分であろう。もちろん差異は対象年齢である。先述した座談会「新しき女性の再建に寄せて」が「婦人の解放といったやうなテーマ」を設定して女性の労働や家庭の問題などが議論されているように、『少女の友』にあったやうな少女の

夢の世界の提示や成長を促すような言説などとは異質な誌面作りがなされている。しかし、この対象年齢の上昇こそがかつての『少女の友』の反復の意義ともいえるだろう。川端の少女小説の系譜として戦後に言及されるものは、例えば『ひまわり』に掲載された「歌劇学校」（一九四九・六〜一九五〇・七）や「万葉姉妹」（一九五一・一〜一二、いずれも代作という説が有力）などであり、また中原も『ひまわり』などかつてと同じ年代に向けたものが中心であるが（但し、中原の場合も少し対象年齢の高い『それいゆ』などもある）、もう一つの軸としてかつての読者にピントを合わせた『婦人文庫』のようない試みがあったことも頭に入れておいてもいいのではないか。

以上のような『婦人文庫』の特色を考慮したとき、「生命の樹」の語り手「私」＝啓子がかつての女学生であり、結婚の話が持ち上がる年頃として設定されていることは偶然ではないだろう。例えば「美しい旅」では女学校四年生として設定された明子という少女が正編の中心であったように、『少女の友』での川端の小説は読者と最も近い存在が主人公的な位置に置かれていた。であれば、恐らく二十代前半に設定された「私」をかつての『少女の友』読者のその後と見ることも可能ではないだろうか。すなわち、想定した読者層に合わせて設定された存在ということである。「生命の樹」が彼女らの「いま」に焦点を合わせた小説だとすれば、「戦争そのもの」を主題化していない小説であるということも説明がつくかもしれない。少なくとも、この小説を川端の同時期のテクストの言説と並列してフラットに捉えてしまうことには慎重であるべきであろう。

三

「美しい旅」正編は、盲聾啞の少女花子をめぐる周囲の人々が花子に対してのそれぞれの役割を定めて行く中で、明子だけが場面に応じて対応をしつつも自らのあり方を定めきれず模索する、そんな明子の主体をめぐる物語でもあった。¹⁰一方で「生命の樹」もまた、一人称の女語りであるという差異はあれ、「私」が自らの位置づけを模索する主体の物語として読むことが出来る。ここではまず、物語が始まる時点の状態として見られる「死ぬつもりである」ことに関わる変遷から分析して

いく。

テクスト上ではじめて「私」が「死ぬつもりである」ことが明らかにされるのは冒頭付近で、「私」が「関ヶ原あたりの柿の新芽、遠江の横垣の新芽、駿河の茶畑の新芽など」を「一心に見入つて」いた時、寺村に「植木のことを考へてるの?」と問われ、「私はかぶりを振つた。そして、とつさに、自分が死ぬつもりであることを思ひ出した。」と語られている。ここで「私」は「一心に」ではなく「無心に見入つてゐた」ことに気づき「自分の死ぬつもりさへ忘れて、新芽の世界を眺めてゐた」と自分の状態を把握しなおす。それを受けて「自分が死ぬつもりであることに気がついてみると、自然がこんなにあざやかに見えるのは、私の心にある死のせるかもしれないなかつた。」と自己を分析している。「忘れて」「無心」でいたことこそが、自分が死ぬつもりであることをあらわしているというこのレトリックは、「自然がこんなにあざやかに見える」ということとセットで考えなくてはならない。もちろんここには芥川龍之介の死後に、芥川による「自然の美しいのは、僕の末期の目に映るからである。」という言葉を受けて書かれた随筆「末期の眼」(『文芸』一九三三・一二)と同様の世界認識を見出すことが出来るであろう。しかし、ここではかつての川端の言説との一致を確認する以上に、この「末期の眼」的世界認識が序盤の「私」の植木・寺村との心的距離を規定していくというテクスト内の機能としてより重要である。この時の寺村の様子は「都会に停車するたびに焼跡を御覧になつて、「やられてるなあ。ここもひどいなあ。」をくりかへしていらした」のように描写されている。一方で植木については出撃の前夜「死の前夜に「星が出てるなあ。これが星の見納めだとは、どうしても思へんなあ。」と言っていた時のことが回想されている。この発言を「私」は「星の見納めだといふおつしやり方には、私への愛がこもつてゐたと思へてならない。」と植木の愛が自分に向いていたものとした上で、「植木さんは、確かに明日死ぬお方だつたから、あの五月の星空はきつと不思議に美しくお見えになつてゐたのではなかつたらうか。」と語り現在の「私」同様に「末期の眼」的な認識をしていた存在として位置づけていく。この回想を受けて「私」は次のように語っている。

さういふ日々があつたので、私は東海道の新芽のあざやかさも、自分の死ぬつもりと結びつけるのかもしれないなかつ

た。／自然よりも焼跡が気にかかる、寺村さんは生きる人、自然に目をひかれる私は、死ぬ人なのかもしれない。焼跡という人が生きるために造りだしたものの消失を気にかける——それは同時に復興させるといことも視野に入っているはずである——寺村と、「自然」に目をひかれる、すなわち「末期の眼」的基準では死の直前ということになる。「私」が対比されているわけであるが、それは同時にすでに死者である植木と「私」との近さを形成しているということでもあるだろう。テキスト初期段階で提示されているのは、植木への思慕ゆえに「死ぬつもりである」ことが、さらにその対の幻想を強化していく「私」のあり方であった。

しかし、植木への思慕を再生産・強化していく基点である「死ぬつもりである」ということが実は当初からの思いではないのは、母から寺村が「私」との結婚の意志を示したことを聞いてのことであったと先に見た通りである。この時の「植木さんのために死んであげよう…」という思いに関して「私」は、「不意」「その時まで考へてみたこともなかつた」「ふとしたこと」など、突発的に沸き起こった気持ちであったことを確認したうえで、その事態を次のように分析している。

出来心かもしれない。気まぐれかもしれない。娘らしい感傷で愛と死との幻にあまえる……。／あるひは、私のうちに埋もれてゐた深い悲嘆、鎖されてゐた熱い思慕が、寺村さんに扉を開かれて、どつとあふれ出たのだらうか。くすぶつてゐた胸に火をつけられて…。

ここではいくつかの可能性の選択肢を提示しつつ分析を試みているが、この段階では結論は出されていない。むしろ、「気まぐれ」や「娘らしい感傷」のようなその場で生じた浮遊した感情なのか、「くすぶつてゐた胸に火をつけられて」のように以前からあったものなのか、両者の意味付けに迷い、引き裂かれている。

そもそもこのように語り現在の植木への思慕の源流を回想することになったのは、寺村と両親の自分に対する認識への疑義からであった。「若い男の方と二人の旅で、私が割と落ちついて見えるのを、寺村さんはどう思つておいでなのだらうか。」「私の家で、娘一人をよく出してよこしたと思ふ。」などであるように、客観的に当時の社会通念に照らして見た時に、未婚の女性である「私」が男性と二人で旅をしているという異常事態にあることに思い至ったことがきっかけとなって展開され

た回想だった。寺村と両親が現状の自分をどのように捉えているかの考察として、植木への思慕の問題が要請されたのであろう。

このような自分がどのように見られているかという問題は、その回想のあとで寺村が両親に「私」と植木のことをどのように伝えているのかあれこれ推測する中でより先鋭化していく。ここで「私」は「どちらにしても、私の両親にとつては、死んだ植木さんよりも、生きて娘をほしがる寺村さんが、問題だった。」「あの基地から帰つて後の私の処置に、困じ果ててゐたからなのだろう。」などと自らの特攻基地体験が適齢期の娘の結婚に影を落としているという風に両親が見ているものとして結論付けている。つまり、両親が自分の存在を世間体に関して問題を抱えている存在と考えているのではないかとしているのである。この背景には、例えば寺村に「特攻隊くづれは、復員兵のうちで最も凶悪ですからな。」という冗談交じりの発言が見られるような、発表当時の元特攻隊員への偏見も関係しているのかもしれない。「特攻隊くづれ」が、本人だけでなく、その関係者にもあてはめられているような空気を「私」が感じ取っているということになるだろうか。

この気づきを受けた次の回想は、基地からの帰還後のことで、「一」で触れた沖繩戦の絶望はここで両親に話している。但し、この戦争末期の最前線の様子を実感をもって伝えて描きさへも、テキスト上では「植木さんの戦死の悲しみを、両親の目からまぎらはず下心はあつた。」と「私」が植木との関係をより深いものとして創り上げていくための道具として用いられている。しかも、ここで重要なのは死のうと考えた瞬間としていた寺村の求婚を又聞きした時点よりも前ということであろう。

たとへば、植木さんが星の見納めの時、私が基地から家へ帰り着いた時、母が台所で寺村さんの意向を告げた時——さういふなにかの、くぎりのたび、時の流れの波頭に立つたたびに、きまつて私は、こんなに植木さんを思つてゐたのかしらと、驚きに打たれる。／さうして、驚きのたびに、思ひは深まつてゆくやうだ。

この引用からは、つい前までは引き裂かれていたはずの「私」の植木への思慕の発生時点が「星の見納めの時」よりも前までさかのぼつてもともと存在したものと設定され、「時の流れの波頭」のたびに深まつていくものとして固定化され

たことがうかがえるであろう。さらに「死なうといふところまで来た後にも、なほこの思ひは、どれほど深まつてゆくものだらうか。」と、思慕の延長線上に「死なう」という考えがあるということを明確な形で規定し、それが今後思慕をより深めて行くことになることを予感している。しかも、この自己についての現状認識を「どこか大胆で自由な世界へ出たやうだった。」と自分を「自由」にするものとして捉えている。死とはこの世界との縁が断たれることであるから、先ほど見た両親による世間体がらみの様々なしがらみなどからも、自分がまもなく死ぬということを抱保にして、束の間の「自由」を手に入れていくことになるだろう。

四

しかし、死ぬことまで考えている植木への思慕とそれにとまなう「自由」は、植木の母との対面によってすぐに崩れることになる。

寺村さんは行くみち、／「植木のおふくろ、一生あいさつばかりして暮らしているやうな、植木夫人だと参つちやふね。」と、おつしやつていたが、そんな方ではなかつたが、私たちが期待してゐたほど、お母さまはお心を開いては下さらなかつた。／敗戦の今日では、特攻隊員を出したなどは、前科者の家のやうに、世間をはばかつて、迂闊にもおつしやれないのだらうか。ああいふものが世にあつたことを思ひ出したくもないといふ風なのだらうか。／さうではない。それよりも、私といふ女に警戒なさつたのだ。

ここで植木の母が心を開かなかつたことは、「ほどほどにお暇すると、私はみじめにしんよんぼりした。」などとあるように、想像以上に「私」のダメージとなつてゐる。ゆえにその理由づけとして「特攻隊員を出したなどは、前科者の家のやうに、世間をはばかつて」などと当時の潮流における一般論に流し込もうとするのであるが、それで自らをごまかすこともできず、「さうではない。それよりも、私といふ女に警戒なさつたのだ。」と、「私」は自身のあり方の問題として解釈し、引き受けて行く。

ここで「私」は植木の母の態度の原因を、寺村が「不用意」に植木と「私」が互いに「愛してゐた」と言ったことに求められているのだが、むしろこの寺村の言動は実は直接「私」に突き刺さっている。

植木さんと私とは、お互ひに愛してゐたと、寺村さんはおつしやつたけれど、ほんたうに確かなことなのだろうか。御遺族のお宅へ持ち出せるほどの事実だったのだからか。／＼（略）／愛はあからさまな言葉に出すべきものなのだろうか。／寺村さんによつて、私の思ひは初めて言葉といふものに現れた。人前にさらされた。日の目を見た。第三者を入れて、現実の問題となつた。

「私」にとつて問題となつてゐるのは、植木の思慕に関わる事項が「第三者」によつて「現実の問題」として「言葉といふものに現れた」ことである。「私」は植木との愛について「ほんたうに確かなことなのだろうか。」と揺らがされている。ここでの揺れは、「死ぬつもり」を担保にした「私」の対幻想と束の間の「自由」が、その原点となる植木との「愛」のあり方に関する「現実」が突きつけられることによつて危機を迎えた故と捉えることが出来るであろう。ちなみに、現実がつきつけられることにより幻想が危機を迎えるというのは、例えば近い時期であれば「住吉」三部作（『反橋』（『別冊風雪』一九四八・一、初出題「手紙」）、『しぐれ』（『文芸往来』一九四九・一）、「住吉」（『個性』一九四九・四、初出題「住吉物語」）などにも見られる川端テクストの一つの特徴でもある¹²。

この出来事は、「私」自身と「私」による植木との関係性の認識の両面にわたつて変化をもたらすことになる。前者でいえば、植木の家をあとした際に「私は電車のなかの人に目を移した。」「私はきものの魔術に心をとられた。」といったように、人や服装といったいわゆる「自然」ではないものに目を奪われていることが注目されるだろう。「私」から「死ぬつもり」の影が消え始めている。後者に関しては、直後に導かれる「生命の樹」で最も言及されインパクトも強い植木の最後の夜の回想にかかわっている。この回想は、出撃前夜に寺村らに連れられて娼家に向かう植木が「私」に声をかけて連れて行ったが、結局二人の間には何もなく純潔のまま戻ってきたというエピソードで、二人で星を見たことへとつながるものである。このエピソード自体がそれなりの字数をかけて語られていて興味深い点もあるのだが、ここでは回想の入りにおいて

「私」が植木との関係を再確認している点に注目したい。この入りの一言目は「私は植木さんと、おなじみと言へるほどのおつきあひもなかつた。あるべき道理も機会もなかつた。」となつてゐる。このうち「あるべき道理」とは、「昨日の隊員は今日基地から消え」という当時の状況であろうと思われるが、いずれにせよ植木との深い結びつきが前提条件として自明視して語られてきたことを考えると、この先の「ほんたうに短い御縁だつたが、植木さんの命は、この基地ではほんたうにお長い方だつた。」という言葉も含め、二人の距離感を後退させていることは注意すべきであろう。そもそもひと月程度の基地体験、しかも次から次へと隊員が死んでいく状況の中で、植木とは若干つきあいが長い程度であつたことを再確認しているのである。それは、その後の植木への思慕の深まりの原点が、元からあつたものではなく、この出来事の強烈な印象ゆゑであつたと再規定したとも考えられるだろう。

その意味で、娼家に「私」という素人を伴うという奇怪な行動をとつた植木を「潔白ではなかつたかもしれない。」としつつ、その誘惑から反省・躊躇・困惑など様々な心の揺れを想像しつつ語る、末尾付近の次のような言い回しは「私」による植木との関係性に関わる認識の行き着いた先として象徴的である。

あれは、植木さんのお心の突発事件だつた。前後の考察へはなかつた。それでなほ、私はありがたい。愛の噴火としておかう。／私にだつて、その後、基地の星の下でも、近江の家の台所でも、こんな噴火があつたのではないか。私をさしあげていいと思つたり、死なうと思つたり…。

植木の「私」へ向かう気持ちも、「私」を「死ぬつもり」にまで至らせた対幻想の重要な要因であつた「時の流れの波頭」とされていた出来事たちも、ここでは「噴火」という比喻で語られている。噴火とは永続性のあるものでなく、一時的で突発的な強いエネルギーの発露であるので、「私」による植木との対幻想が自らをとりまく状況の中で一時的に爆発的に燃え上がったものに過ぎなかつたと確認しているということになる。それはテキスト序盤に見られた植木への思慕にまつわる様々な思いが、幾らか思入れのある戦死者に対する追悼的な、時代の影響を色濃く受けた強迫観念から来るものに過ぎなかつたのかもしれないということを知るにすぎない。少なくとも「私」は植木にまつわる死に至る呪縛からは解放され

ている。但し、一方では死を担保とした束の間の「自由」は失われることになり、両親をはじめとした世間からのしがらみは残ることになる。それは、敗戦直後というある種の混乱の中で揺れ動いた「私」の主体が、社会規範としての世間の中に（再）回収されていったと見ることもできそうである。

五

「二」でも触れた『婦人文庫』一巻二号の座談会「結婚と道徳について」は、「最近の若い女性が非常に道徳的に混乱状態に陥つてゐるといふやうなことが一般に言はれてゐますが」（記者）という問題意識、そしてその道徳的頹廃は戦争の後に何処でもあること（今日出海）と言う認識のなかで、「結婚を考へてゐない」若い娘が出て来ているという問題や男女同権と家族制度に関してなどが話題となつてゐるが、「未亡人」の問題も一つの議題となつてゐる。ここでは「二十前後の未亡人が非常に多い」（河盛好藏）といわゆる「戦争未亡人」について指摘されているが、まさにそれは年齢的には想定されている『婦人文庫』の読者層であり、川端が活躍した時期の『少女の友』読者のその後の姿の一つの形であるだろう。この時、戦死した植木を慕い殉ずるつもりにまで思いつめた「私」は、「生命の樹」が『婦人文庫』と言う場で掲載されていることを視野に入れた時に、疑似的な「未亡人」として見ることも可能ではないだろうか。そこまでいかなくとも、戦争を経て多かれ少なかれ自己のあり方に問題を抱えていたであろう読者層の一つのモデルではあるだろう。今日出海は当時の「未亡人」に関して「何かよほど未亡人といふものは、社会の目に束縛されるとか、さういふものに気を奪られてゐるものが多いんぢやないですかね。未亡人がかういふことをしてはいかんとかね。余り楽しんで具合が悪いだらうとか。さういふ妙な社会の圧迫みたいなのを感じ、——社会の少なくとも眼といふものを感じて、窮屈になつてゐるだらうと思ふね。」としているが、両親の規範的な視線を感じながら植木との関係性の捕捉に迷走しつづけた「私」の姿は、若い「戦争未亡人」と重なつてゐるようにも思えるのである。

では、そのような「私」の行方はどう予感されているのだろうか。最後にテキスト末尾を見ておこう。

「啓子さん、啓子さん。」と寺村さんのお声が呼びさました。／「あの木をみろよ。」／「どの木……？」／「焼けた木に、芽を吹いてる。」／「ああ、あれ……、ほんたう。」／街路樹だつた。枝はことごとく焼け折れて、炭の槍のやうに尖つた、その幹から、若葉が噴き出してゐるのだつた。若葉はぎつしり、重なり合ひ、押し合ひ、伸びを争ひ、盛り上つて、力あふれてゐた。／篠懸か銀杏かはわからない。さういふ木々が整列してゐるのだつた。どこかはわからない。広い舗装道路が、真直ぐに通じてゐるのだつた。焼けただれた街に、自然の生命の噴火だつた。／「御使また水晶のごとく透通れ生命の水の河を我に見せたり。……都の大路の真中を流る。河の左右に生命の樹ありて……その樹の葉は諸国の民を癒すなり。……」／ヨハネ黙示録の一節が、私の心に浮んで、真直ぐな道路は、その河のやうに見えた。／「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。」／本郷にある、寺村さんのお友だちのおうちへ、私たちは帰るのだつた。

「焼けただれた街」において焼けた木から芽吹いている様子を「自然の命の噴火」としているが、ここで反復された「噴火」の語は強いエネルギーの発露という側面から使用されている。静的なものとしての「自然」を眺めていた「末期の眼」的な視点とは対照的に、新芽という生れ出て来るエネルギーとしての「自然」に焦点を当てていて、ここでも「私」の認識の変化が確認できる。そして、舗装道路を「都の大路の真ん中を流る」河に、芽吹いた街路樹を「生命の樹」とと、「ヨハネ黙示録」にある風景に見立てて幻想を作り上げている。ここで聖書が登場することをキリスト教と結びつける論もあるが、テクスト上の機能としては恐らく「私」がミッション系の女学校を卒業して、女学校の時代の教養が呼び起されたものと考えらるべきであろう。生命の樹の幻想から導かれる言葉のうち、ここで意味を帯びてくるのは、「その樹の葉は諸国の民を医すなり。」や「新しき天と新しき地を見たり。」といった言葉であろう。通俗的な言い方をすれば、「私」の幻想の対象が過去から未来へと移り、幻想の中に戦争に疲弊した人々へのいやしを見ているということになるだろう。ここには「僕は生きてゐる方に味方するよ。」という言葉が見られる「生きてゐる方に」(『旬刊 ニュース』新年増刊号、一九四九・一・一)への接続を見出すこともできるが、いわゆる「未来志向」的な過去への反省を置き去りにしたままの言説につなが

る危険性が含まれていることには注意が必要である。またこの幻想が、右に述べたように女学校時代の教養から来ていることも重要であろう。植木にまつわる過去の呪縛から解放され、未来を想像するようになった「私」の立つ位置はさらに過去の女学校時代への回帰としてもたらされたことになるからである。これを「未亡人」を含むかつての『少女の友』読者に敷衍してみると、一九四〇年あたりから敗戦までの歴史を空白化させることによって「いま」を生きる存在とするということになるが、その空白期は時代の空気の中で発表が許されなかった中原淳一の空白期でもあった。であれば、このテキストはきらびやかであった頃の『少女の友』への回帰を以って、かつての少女たちに「前を向く」ように促しているとも言えそうである。

「生命の樹」は「私たちは帰るのだつた」と閉じられる。長濱拓磨は「私たち」「帰る」という表現に注目して「私」と寺村に「一層強い結びつきを予感させる」としているが、生命の樹と見立てる幻想が寺村の指摘から始まっていたことも含め、最終段階において二人の距離がかなり近くなっていることは間違いない。寺村との結婚を予感させると考えても大きな間違いではないだろう。もし結婚ということであれば、最もわかりやすく世間体などからくる「社会の圧迫みたいなもの」から逃れることにはなる。川端も先に見た座談会で「結婚を考へ得ないお嬢さんがあるとすればそれも敗戦の打撃の一つですネ。」と述べており、さらに「未亡人」の結婚も視野に入れるような発言も見られ、敗戦後に疲弊した女性をいやす解決を結婚に求めている節がみられる。しかし、それは戦前から続く強固な社会規範に収まることであり、死への幻想から一時的にでも「私」が感じたような「自由」は失われるだろう。その意味でこのテキストが示す解決は対処療法的なものではない。

彼女らの戦後における「自由」の問題は今でも問題を抱える非常に重要な問題であるが、本稿の手に負える範囲をはるかに超えている。また川端の作家論的な問題に関しても、「敗戦後の私は日本古来の悲しみの中に帰ってゆくばかりである」〔哀愁〕〔社会〕一九四七・一〇）という発言の見られるような時期に、限定的であれ時間軸としての未来の側、つまり「いま」不確定であるものに目を向けるようなことが書かれてもいるテキストを書き残していることに関して、語りの性別

や発表媒体の位相の問題に注意しつつも、考えて行く必要があるだろう。いずれにせよ、少なくとも「生命の樹」という小説の一部の記述を川端の戦争観といったものと短絡することが出来ないのは確かかなようである。

註

- 1 本多秋五『物語 戦後文学史』（新潮社、一九六六・三、引用は岩波現代文庫（二〇〇五・八）によった）
- 2 「生命の樹」に関して本稿では初出を本文として分析を進めて行く。なお、十重田裕一によってGHQ/SCAPによる検閲により削除された部分があることが明らかにされているが（内務省とGHQ/SCAPの検閲と文学——一九二〇—一九四〇年代のメディア規制と表現の葛藤（鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重編『検閲・メディア・文学——江戸から戦後まで』新曜社、二〇一二・三）、読者についても視野に入れた本稿では、人の目に触れえたか否かということが重要であり、考察の対象とはしない。
- 3 長濱拓磨『川端康成「生命の樹」論——戦後文学と聖書』（『キリスト教文学研究』二〇一二・五）
- 4 李聖傑『川端康成における戦争体験について——「敗戦のころ」を手がかりに——』（『ソシオサイエンス』二〇一〇・三）
- 5 同4
- 6 川島至『川端康成の世界』（講談社、一九六九・一〇）
- 7 長谷川泉『「生命の樹」と戦争』（『国文学 解釈と鑑賞』一九八一・四）
- 8 仁平政人は従来の研究に「戦前と戦後の間の切断を自明化し、戦後の川端文学の特質を見いだそうとする思考」（『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』（東北大学出版会、二〇一一・九）があったと指摘している。
- 9 この点に関しては拙論「単行本『哀愁』の構造——川端康成の戦前／戦後再考にむけて」（『川端文学への視界』二〇一四・六）、「単行本『哀愁』の追悼テクスト群——（統）川端康成の戦前／戦後再考にむけて」（『川端文学への視界』二〇一五・六）など参照。

- 10 この点に関しては拙論『少女の友』のコミュニティと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ——」（『日本近代文学』二〇〇九・五）を参照。
- 11 「軍神」から「特攻くすれ」へと価値が転換された元特攻隊員や周辺の女性について論じたものに時野谷ゆり「坂口安吾「決闘」論——戦後の「特攻隊」表象の中で——」（『昭和文学研究』二〇一〇・九）がある。
- 12 このあたりに関しては、拙論「上書きされた「三部作」——川端康成「隅田川」——」（『三田国文』二〇一二・一二）を参照。
- 13 キリスト教に注目した論文としては長濱拓磨の論（同3）の他に、武田勝彦「川端康成と聖書——「生命の樹」を中心として——」（『国文学 解釈と鑑賞』一九六九・九）がある。
- 14 同3